

Title	フィクションの鑑賞行為における認知の問題 [ 学位論文内容の要旨/学位論文審査の要旨/日本語要旨/外国語要旨 ] ( 学位論文内容の要旨 )
Author(s)	石田, 尚子
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10083/61311">http://hdl.handle.net/10083/61311</a>
Rights	
Resource Type	Thesis or Dissertation
Resource Version	publisher
Additional Information	There are other files related to this item in TeaPot. Check the above URL.

This document is downloaded at: 2018-03-17T06:26:18Z



## 学位論文内容の要旨

学位申請者	石田 尚子 【比較社会文化学専攻 平成23年度生】	要 旨
論文題目	フィクションの鑑賞行為における認知の問題	<p>フィクション作品の鑑賞は、現実の対象や状況に対する場合と同様と思われる情動をもつことが、説明されるべき問題として論じられてきた。先行研究としては、1 こうした鑑賞における認知が独自の特性を持ち、喚起される情動は擬似的なものであるという立場や、2 行動が不可能な状況としての表象というカテゴリーにフィクションがノンフィクションの一部と共に含まれ、結果前者の鑑賞と後者のそれとの共通性が説明されるという立場がある。</p> <p>申請者は、これらの立場に対し、鑑賞者にとって作品がフィクションであることと、作品を取り巻く事情、の双方が認知されていることの不可欠性を主張する。そして、フィクション鑑賞に関与する二つの心的機能、作品への没入機能と外部文脈の背景知識の認識機能に基づく説明理論が提出される。</p> <p>これらの機能は強弱があり、相反的な働きをする。没入機能が高ければ他方は弱くなり一般的なフィクション鑑賞の状況（情動が喚起される場合）となる。逆に弱ければ、背景知識の認識機能が高まり、批評的鑑賞の状況を示す。さらに通常の鑑賞行為から逸脱した場合、つまり作品への無関心（二つの機能が弱い場合）やマニアック（双方が優勢に見える）な状態も位置づけられる。</p> <p>さらに、「フィクションのパラドックス」すなわち一方で情動を感じる対象の存在を信じ、他方で実在しないとも信じていることの説明が、二つの心的機能の異なった時点でのはたらき方の差異として説明される。</p> <p>こうしたことから、先行研究に比較して、石田氏の解釈理論は、より説明力があり、説得力があると主張される。</p>
審査委員	(主査) 准教授 三浦 謙	
	准教授 中野 裕考	
	教授 清水 徹郎	
	助教 宮下 聡子	
	助教 田中 琢三	